
保育士養成校におけるソルフェージュ教育の必要性

音楽表現とリトミックからの実践

岡崎 裕美・二見 美千代・佐久間 敦子

Necessity of the Solfege Education in a Training School for Nursery-school Teachers
Practice by Music Representation and Rhythmic

Hiromi OKAZAKI / Michiyo FUTAMI / Atsuko SAKUMA

キーワード：保育士、音楽の基礎、読譜力、リズム遊び、音楽の楽しみ方

I はじめに

初心者へのピアノ実技指導については、多くの保育士・幼稚園教諭養成施設において同様の課題がある。一つは、入学者の多くがピアノの未経験者であり、音楽の基礎知識が乏しいという点での指導の難しさである。二つ目は、「保育者としての音楽実技能力とは何かということであり、音楽指導を行うにあたって必要な素養とは何か、その素養を育むための手段は現状で良いのか、その指導内容が時代のニーズと合っているのかを常に問い省み、授業内容を改善していくこと」（上野亜希子他 福山市立大学教育学部研究紀要）である。

一つ目の課題については、本学においても、入学前のアンケートによれば、毎年40%から50%の学生がピアノ未経験者である。また、経験の有無にかかわらず、音符や音楽用語の理解などの基礎知識の習得についてもばらつきがあり、経験のレベルも大きく異なり、指導にかなりの負担がかかっている。

また、本学のピアノの実技指導においては、レベル別（習熟度別）のグループ編成をしていないため、指導者の個人的な創意工夫や努力に委ねられている。習熟度別グループにしないのは、グループ内の教え合いや刺激の効果を狙っているからである。このことで成長する学生も多いが、一方でまったくの初心者においては「できない自分」を感じ、努力する前に諦めるなど、授業に対する意欲をなくす学生も出ている。担当教員の熱心な指導・助言があっても、授業自体が苦手になるのでは、教員の苦労が無駄になることであり、学生にとっても不幸なことである。

本研究は、本学の学生の実態を調査し、入学前教育の中で少しでも基本のレベルに近づけ、ピアノの実技の指導にかかる負担の軽減につながる方法を考え、かつ入学後の授業への意欲・関心を維持できるような入門期の指導やその後の授業の内容や方法、採用試験の対応までを総合的に支援する教育の在り方を探るものである。

以下の論については、本学の入学前教育のアンケート、保育士・幼稚園教諭採用試験、養成校における音楽実技の具体例の報告を佐久間が、高校生セミナー・模擬授業・入学前教育における音楽講座の実践研究からの提案を岡崎・二見が担当し、まとめた。

Ⅱ 入学前教育時のアンケート・ピアノ初心者講座、採用試験、及び養成校の音楽実技の指導事例について

1. 入学前教育時のアンケートについて

本学においては、入学予定者のうち、希望者にピアノ初心者講座を実施してきた。入学前教育を明確に位置付けた平成28年度以降の受講者数は30名程度（枠を設けたため）から徐々に増加し、2021年度入学生では約半数が希望した。また、今年度の入学前教育時には、音楽の基礎知識の理解についてアンケートを実施した。結果は以下のとおりである。

対象者：入学前教育（2020.12.20実施の参加者49名）

表1 ピアノの指導を受けたことの有無・習得レベルの調査

経験の有無	経験なし 23名 47%	経験あり 26名 53%					
レベル		バイエル等の教本の利用					バイエルを用いず
		バイエル途中 6名	ブルグミュラー 1名	ソナチネ 2名	ソナタ 0名	ソナタ以上 1名	
経験年数		1～3年 3名 16年 1名 無記入 1名	7年 1名	8年 1名 10年 1名	—	15年 1名	1～5年 5名 6～8年 6名 12年 1名 無記入 2名

*ピアノの指導を受けた経験の無い者は全体の47%、経験者のうちバイエルの途中までと回答をした者は6名であり、演奏技術の習得について、半数は未修得と想定される。

表2 音楽的基礎知識の理解についての調査（数字は人数）

音楽的基礎知識	未経験者 23	バイエル途中 6	ブルグミュラー 1	ソナチネ 2	ソナタ 0	ソナタ以上 1	バイエル不使用 16
ト音記号の音符 読める 17	4	2	1	—	—	1	9
数えながら 25	14	4	1	—	—	—	6
ヘ音記号の音符 読める 8	1	1	1	—	—	1	4
数えながら 31	15	4	—	1	—	—	11
楽譜の記号の意味 理解 23	4	5	1	1	—	1	11
音符や休符の理解 22	3	4	1	2	—	1	11

*入学前教育で基礎的な内容を学習した後の回答のため、「わかる」の回答が増えている可能性が高い

*経験者であっても、基礎的な知識の理解が乏しい状況が予測される。音楽の基礎知識に関しても入門期に個々のレベルの確認が重要で、グループ編成や学習内容の構成、指導法に反映させることが重要である。

*この調査は、2月13日の学校推薦型等の入試による入学者に対する講座でも実施し、傾向を再度確認する。

2. 保育士・幼稚園教諭採用試験における音楽理論・音楽実技について

採用試験対策本のいくつかを散見すると、実技試験については、おおむね以下のとおりになる。

(1) 実技試験

① 課題曲演奏

（世界中のこどもたちが、思い出のアルバム、どんぐりころころ、不思議なポケット、犬のおまわりさん、山の音楽家、あわてんぼうのサンタクロース、季節の歌等）

② 弾き歌い

③ 自由曲演奏

④ 初見演奏・視唱

⑤ 歌唱

⑥ コールユーブンゲン

⑦ 手遊び歌実演

*初見を課す幼稚園が増えており、豊かな表現や読譜力・初見力のある学生を求めるところが多くある。(うまく弾くこと以上に、楽譜を見て弾く力の育成が重要。)

*弾き歌いは、日常の保育の中で求められる力であり、弾き歌いを主とする試験を課す所も増えている。(歌唱と伴奏のバランスが取れているか、大きな声で歌うのではなく、正しい発声法で歌うことができているかを試されるため、歌唱法についての学習も必要である。)

(2) 音楽理論

① 音楽用語・階名・調

強弱を表す記号、速さを表す記号、発想やその他の記号、音階と音名、階名、調号

② 音程・移調

③ コードネーム

*音楽用語の読み方や意味を選択または記入する問題が出題されており、音楽の基礎知識の理解力が問われる問題は毎年出題される。基礎理解があって初めて楽譜を見て弾くということが可能であり、覚えて弾くのではなく、楽譜を読む力の育成が重要である。

■引用文献

・「保育士及び幼稚園・小学校教員養成課程における音楽実技能力育成の現状と課題」 上野亜希子・神古麻弥・佐分利小夜子・高橋元子・永井益子・古山典子 福山市立大学教育学部研究紀要 vol 7 2019

■参考文献

- ・「教員・保育士養成課程における初心者へのピアノ実技指導の一考察」 穴澤彩佳・松田由理子・寺田有希 國學院大學北海道短期大学紀要第35巻
- ・「幼稚園・保育所・小学校の採用試験における音楽に関する出題傾向」 衣川久美子・山崎和子・由井敦子 甲南女子大学研究紀要第52号 人間科学編 (2016年3月)
- ・令和2年度岡山市職員(保育幼児教育)採用選考試験受験案内 岡山市人事委員会・岡山市教育委員会
- ・保育士就活バンク https://hoikushi-shusyoku.com/column/posuto_846/
- ・studio ドルチェ ピアノ教室 <https://pianodolce.jp>
- ・保育士・幼稚園教諭採用試験問題集2021年版 実務教育出版
- ・保育士実技試験 2020年版 成美堂出版
- ・スイスイわかる幼稚園・こども園教員採用実技試験 一ツ橋書店 他

Ⅲ 養成校の実践例(下線部は引用)

國學院大學北海道短期大学研究紀要 第35巻

「教員・保育士養成課程における初心者へのピアノ実技指導の一考察」 穴澤彩佳 他

入学者のピアノ演奏レベルは様々であり、まったくの初心者かそれに近い学生が多いと言わざるを得ない状況が続いている。教育や保育の現場から求められているピアノの演奏レベルに到達させることはかなり難しい。」状況から、「ピアノ実技Ⅰ・Ⅱ」「保育表現技術(音楽)」の教育実践では、前期1回目の授業でピアノ指導を受けたかの有無と理解度レベルの調査をし、学生をグループ分けし、自分のレベルに応じた環境で指導を受けるようにした。それによるレベルの区別は以下のとおりである。

初級：指導を受けたことがなく、音符が分からないあるいは少しわかるがピアノは弾けない。

中級：音符は少しわかる、ピアノは右手で弾ける、あるいは両手で弾ける。

上級：音符が分かりピアノを両手で弾け、ピアノの指導を受けたことがある。

回答の率を見ると、年々初級の率が上がっており半数以上が未経験者である点は、本学も同様である。

実際のグループ分けには、実際に弾かせることや、簡単な基礎理論のチェックテストの実施も必要だと考えるが、「同レベルの学生がグループ化され、授業の効率化が見込まれる」としている。

福山市立大学教育学部研究紀要 第7巻 2019

「保育士及び幼稚園・小学校教員養成課程における音楽実技能力養成の現用と課題」上野亜希子 他
において、2018年9月に実施した、いくつかの大学のシラバスの調査によれば、授業の内容については以下のとおりであった。

① 弾き歌いを主に行うもの	11校
② 教則本を使用してピアノ実技に特化しているもの	1校
③ 弾き歌いとピアノ実技を同程度に行うもの	14校
④ 楽典及び音楽実技全般を扱う中に弾き歌い・ピアノ実技を組み込んでいるもの	2校

また弾き歌いの授業においてはコードネーム伴奏を丁寧に指導している大学が多くみられたとした。

コードの学習に重点を置くということは、その曲の持つ調性感を育成するという意味があるが、その一方には、初心者には市販されている伴奏譜では演奏が困難であるという背景がうかがえる。とし、主要三和音によるコードを中心とし、それに特殊な和音の学習を行い自分で伴奏を編曲できる能力の育成を目指す大学の授業計画を示している。

楽典とソルフェージュに半数の時間を費やし、楽譜を読む、演奏するための基礎知識と技術を丁寧に指導しその後子どもの歌の歌唱と伴奏を、基礎と応用に分けて徹底して指導する大学の事例も紹介している。

採用試験や現場に出てからも、自力で学び続けていくためには、このような養成課程での授業計画が重要であり、コードネームによる伴奏法などと共に、効果的に組み合わせていくことが重要ではないかと考える。

初心者が、何とか工夫して子どもたちと季節の歌や手遊び歌を楽しむことができるよう現場で活用できる音楽技術の習得を可能にし、また担当教員の工夫や苦勞が報われる教育、学生にとって、学びが実感できる教育の為に、できることを一歩ずつ実践していくことを提案したい。

テキストについては、採用試験では、音楽理論、歌唱、初見演奏を求められることが多く、課題として園の生活に関係した挨拶の歌や季節の歌、行事の歌などが課せられることなどから、『こどものうた200』（チャイルド社）や、『こどものうた140選』（ドレミ楽譜出版社）、『心を育む子どものうた』（教育芸術社）等が弾き歌いのテキストとして採択されている。

ピアノの実技レッスンでは『バイエルピアノ教則本』を使用する大学が7校（37校中）であったが、学生各自のレベルに応じて担当教員が適した楽曲を与えるという大学も多かったという結果であった。前述の大学のように、ソルフェージュを前半で徹底して指導する方法も検討する価値があると考えられる。

（佐久間）

Ⅳ 研究の背景

保育士養成課程において、音楽は重要な位置づけとなっている。幼稚園教育指導要領において音楽については、表現の内容(6)に「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。」¹⁾と記されている。保育士養成校である本学においても、保育士として持つべき音楽能力を様々な視点から捉え、より効果的な教育方法を模索したい。

保育の現場では、生活の歌、季節の歌、行事の歌、園歌など多くの楽曲をピアノで演奏する場面がある。学生は、在学中より多くの楽曲を演習することが求められるが、2年間という短い期間に習得できる数には限りがある。卒業後、就労しながら新たな楽曲を習得することも考えられるため、在学中に楽

譜を読む力すなわち読譜力（ソルフェージュ）を身につけることが重要である。読譜力（ソルフェージュ）がある場合と無い場合では、保育士として鍵盤楽器を演奏する場合の演奏可能な楽曲数に大きな差が出るといっても過言ではない。

鍵盤楽器の演奏においては、音を読む、リズムを打つ、運指を正確に把握する、鍵盤の位置を正確に把握する、フレージング、強弱など多くの知識と技術が必要とされる。また、弾き歌いについては、これらの技術に加え、弾いている手元ではなく子どもに向かって歌いかねなければならない。このため、本来多くの練習時間が必要とされるが、練習方法を効率化することにより、限りある時間の中でより多くの楽曲を習得することができるのではないだろうか。そのために、読譜力（ソルフェージュ）を強化することが初めの一步と考える。

V 研究の目的

保育コースに特化する本学の「保育者をめざす幼児の音楽」の学びにおいて、「読譜力（ソルフェージュ）」を学習することは必要不可欠である。特に鍵盤楽器演奏未経験者においては、基礎的な「読譜力（ソルフェージュ）」と「音楽理論と知識（楽典）」を学ぶことがより重要である。また一方で、鍵盤楽器演奏経験者においても、保育に関わる一定の「読譜力（ソルフェージュ）」と「音楽理論と知識（楽典）」を習得することは必要である。本研究では、この二つの取り組みを継続することによって、学生全体における音楽的能力のスキルアップを図り、長期的には、保育士に必要な音楽基礎実技と音楽基礎知識における基盤を作り、ピアノ実技習得の礎を築くことを目的とする。また一方で、ミュージックベルやボディパーカッションなど様々な音楽の楽しみ方を学ぶことにより、学生自身が音楽に親しみをもち、保育士として幅広い音楽表現を習得することも目的とする。

VI 実践研究 令和2年度に実施した取り組み

1. オープンキャンパス『リトミックで遊んでみよう』：8月2日(日)

1) 模擬授業 リトミック「王子様と一緒にお城に行きましょう！」

1)－1 音符を身体表現する

音符を身体表現することの主な目的は、「音符」の音価を習得することである。これは、音楽を学習するために必須である「音符」を、理論からではなく体感的に音符の長さを習得する方法であり、言語理解が発達途中である幼児にとって容易に「音符」の音価を習得することが期待できる。

本実践では、指導者が演奏する2分音符、4分音符、8分音符、付点のリズムの四つの音楽を聴き、各音符の長さを身体表現する取り組みを行った。

方法は、まず全員で「くま」、「兵隊」、「小鳥」、「王子様が乗っている馬」のイメージで動く取り組みを行った。「くま」はゆっくり足踏み、「兵隊」は普通の速さで軽快に足踏み、「小鳥」は速い速さで細かく足踏み、「王子様が乗っている馬」はその場でスキップをするという動きとした。

次に3つのグループに分かれ、各グループに「くま」、「兵隊」、「小鳥」から1つずつ担当を決め、自分の担当の音楽が聞こえた時のみ動く取り組みを行った。また、「王子様が乗っている馬」の音楽は全員で動くこととした。

なお、本実践で使った音楽は、「くま」は2分音符、「兵隊」は4分音符、「小鳥」は8分音符のみで構成されているものとし、また、「王子様が乗っている馬」は付点8分音符と16分音符で構成されたリズムのみで構成されているものとした。

上記のように、イメージで動く取り組みをした後、各音楽と音符（付点のリズム含む）を一致させる取り組みとして、各イメージの音楽が何の音符で構成されているのか説明をし、動きと音符の関係性につ

いて指導を行った。

1) - 2 拍に合わせる

音楽の根底には「拍（ビート）」が流れている。この拍に合わせて身体を動かすことは、音楽の基本的な流れを掴むための手がかりとなる。音楽を意識的に聴き、それに合わせて動くことにより基本的なビート感を養い、また音の有無によって即時に動きを変えることにより、集中力を養うことが目的である。

本実践では、指導者のピアノ演奏に合わせて学生が手拍子や足踏みをし、音楽が止まったら動きを止め、また音楽が聞こえたら動き始めるという取り組みを行った。

1) - 3 音の高低に合わせる

幼児において、音の高低を聴き分ける時に「高い音」「低い音」という認識を持つことは少ない。「高い音」は、「キラキラしている」や「小さい音」という言葉で表現し、「低い音」は、「怖い音」や「大きい音」という認識を持つ場合がある。このため、幼児に指導する場合は、身体の「高い位置・低い位置」と「高い音・低い音」を繋げることにより、音の高低という認識ができるようにすることが必要である。

本実践では、この目的の説明とともに、実際に指導者の演奏する音楽に合わせて、高い音が聞こえた時は頭上で手を叩き、低い音が聞こえた時は膝を触るという取り組みを行った。

1) - 4 休符を身体表現する

本実践では、休符に注視し、意識的に休符を体験することを目的としている。音がある部分と音のない部分を瞬時に聴き分けるという内容で、楽曲「ロンドン橋」（イギリス民謡）を使用し、歌の部分は簡単な振り付けを繰り返し、休符の部分は両手をパッと広げるという取り組みを行った（参考①）。馴染みのある楽曲を使用することにより、幼児（本実践では学生）が楽しみながらその目的を達成することが期待できる。

また、歌詞の「さあ、どうしましょう」の部分では、「素敵なお姫様」のポーズを各自考えて即興的に動くという取り組みを行った。これは、「素敵なお姫様」という言葉から想像力を働かせ、瞬時にポーズをするため、想像性、瞬発力を養うことが期待できる。

参考①：「ロンドン橋」（イギリス民謡）と動き（●は、休符）

歌詞→	「ロンドン橋落ちる	●	落ちる	●	落ちる	●
動き→	トントン・・・	パッ	トントントン	パッ	トントントン	パッ
歌詞→	ロンドン橋落ちる	●	さあ、どうしましょう」			
動き→	トントン・・・	パッ	素敵なお姫様のポーズ			

1) - 5 結果と考察

音符を身体表現する取り組みでは、学生がグループに分かれて担当の音楽を動くことは比較的スムーズにできた。これは、初めに全員で4つの音楽の動きを幾度か繰り返し行ったため、学生は聞こえる音楽とイメージを一致させることができたと考えられる。

また、各音楽と音符（付点のリズム含む）を一致させる取り組みを行った時は、若干戸惑う学生もみられたが、ほとんどの学生は正しく動くことができた。

拍に合わせる取り組みと音の高低に合わせる取り組みにおいては、どちらも学生は比較的早く指示した動きができた。これは、学生が集中して音を聴き、意欲的に取り組めたためと考えられる。

また、休符を体験する取り組みでは、指導者の振り付けを模倣する部分は、ほとんどの学生が問題なくできた。「素敵なお姫様のポーズ」を行う取り組みでは、学生は周りの様子をうかがいながらではあったが、それぞれ思い思いのポーズを取ることができた。

2. 高校生セミナー：8月5日(水)

模擬授業『保育の音楽』(50分) 四街道北高校1年生16名対象

1) 模擬授業の内容と目的

子どもの音楽的表現力をより豊かに育むためには、まずは保育者自身が自らの感性を磨き、豊かな表現力を身につけることが大切である。本実践では、保育士養成課程の音楽の基礎知識を解説し、身体表現を通して体験した。

保育士を目指すピアノ初心者にとっては、楽譜の理解(読譜)が必要であると考え。まず、音楽の基礎のひとつである「拍子の理解」から4分の4拍子を例にとり、拍子について説明を行った。拍子の理解においては、幼少期にピアノを習ったことがある生徒や吹奏楽などの部活動で演奏の基礎を学んだことがある生徒と、全くそれらの経験のない生徒では理解度に温度差があるが、音楽の基礎を改めて確認しておくことは重要である。音符やリズム、調などの基礎知識を習得することで、ピアノ実技や弾き歌いのスキルアップに大きく役立つ。

この模擬授業では「拍子とリズム」に焦点を当て、50分という短時間の中で楽しく学ぶ内容を指導した。

2) 模擬授業(1) リズムダンス「まねっこリズム」(作詞・作曲：高附恵子)

拍子についての理解

2) - 1 拍子についての理解

「まねっこリズム」は、リーダーの創作したリズムを模倣するリズムダンスの楽曲である。身体表現に入る前に、五線譜に書かれた拍子をどのようにカウントするかを理解するために拍子の説明をした。4分音符(♩)1拍をリング1個と設定する。4分の4拍子とは、1小節の中に4分音符が4つ分入る拍子であるから、1小節にリングが4個分入る拍子である。ということは、4分の3拍子の場合は1小節にリングが3個分、4分の2拍子の場合はリングが2個分入った拍子であることを理解することができる。

2) - 2 リズムについての理解

拍子の基本を理解した上で演習に入る。本実践では、4分の4拍子の「まねっこリズム」という幼児のリズム遊びの曲を使用して取り組んだ。1小節間にリング4個分、つまり「♩ ♩ ♩ ♩」の音符をアレンジする。8分音符(♪)は、4分音符の半分の単位、つまりリング半個と考え、数字で表すとリングが0.5個と理解する。

このように、音符や休符をリングの単位や数字に置き換えることで、五線譜に書かれたそれぞれの拍子を理解することができる。

2) - 3 リズムの創作

遊びの演習前に曲を聴いてみることで、リズム遊びの全体像を把握し、イメージを膨らませることができる。

本実践では、4分音符と8分音符、4分休符を使って、4分の4拍子1小節間のリズムを創作する。

まず、まねっこのリズムの部分(パンパンパン)を筆者自身が4分音符3つ(パンパンパン)と4分休符1つ(ハイ! =相手にリズムを真似するように促す言葉)で例を示し、生徒がそのリズムの真似をする。この時に大切なことは、リズムを言葉に置き換えて相手(幼児)に伝え、その言葉で相手(幼児)が真似をすることである。言葉で伝えることによって、幼児は「音」と「言葉」でリズムを体感することができる。

次に、8分音符を交えたリズム(パンパパン)と4分休符1つ(ハイ!)を叩いてみる。このように音符を組み合わせることで、1小節の単位を体感することができる。

また、リズムを歌の歌詞にして創作することは、生徒(学生)にとっても幼児にとっても、リズムの

組み合わせが理解しやすい。

2) - 4 リズムダンスの通し練習

歌い出しの5小節間は、リズムダンスの振り付けを行い、全員で練習した。創作リズムの箇所からは、Aさんの創作リズム（1小節間）→全員が模倣する。続いてBさんの創作リズム（1小節間）→全員が模倣する。同様にCさんの創作リズム（1小節間）→全員が模倣する。最後の「じょうずにできました！」の箇所は、全員が右手で大きなハナマルを描く。これを1コーラスとして、リズムの創作メンバーを交替して2コーラス続けて行った。

2) - 5 結果と考察

「まねっこリズム」は、シンプルな楽曲ではあるが、生徒にとっては初めて聴く曲であり、リズムの創作の作業もあってハードルも高かったかもしれない。しかし、このような模擬授業では、間違えることも含めて楽しむ気持ちや、みんなで励まし合ったり応援し合う気持ちを共有することが大切であると考ええる。失敗することを恐れず一歩踏み出してチャレンジすることで音楽表現の楽しさを実感し、仲間と協力して取り組むことで達成感にも繋がるからである。

時間に余裕があればグループに分かれてしっかり練習し、心地よい緊張感の中で成果発表に臨むことができたに違いない。次のステップに挑戦する機会があれば、今回の経験を生かして多様なリズムのバリエーションを楽しんでもらいたい。

3) 模擬授業(2) ボディパーカッション「心合わせて手拍子タタ・タン」

ボディパーカッションは、歌が苦手でも楽器の演奏ができなくても音楽として簡単に演奏を楽しむことができ、誰でも参加することができる。

今回の演習では、4分音符と8分音符と4分休符で作曲され、手拍子のみの3つのリズムパートで構成している「心合わせて手拍子タタ・タン」（作：山田俊之）の楽曲を使用した。

3) - 1 リズム打ちの練習手順

生徒をA、B、Cの3パートに分けてリズム打ちの練習をする。練習の手順は次の通りである。

- ① 全員でAパートのリズムを練習する。
- ② 全員でBパートのリズムを練習する。
- ③ 全員でCパートのリズムを練習する。
- ④ Aパート、Bパート、Cパートの3人1組を作って練習する。
- ⑤ 全体を大きくAパート、Bパート、Cに分けて練習する。
- ⑥ 全体を3つのグループに分け、成果発表をする。

3) - 2 リズム打ちの練習のねらい

まず、全体の楽曲の構成を把握するために、リズム譜の読み方を説明した。それぞれのパートのモチーフと全員がユニゾンで演奏する箇所を確認した。

次に、自分が担当するパートのモチーフだけでなく、他のパートが同時にどのようなリズムを打っているかを理解しておくために、3) - 1 ①②③の練習をする。この練習は、それぞれのパートがスタートするまでの小節数の確認をすることができる。

3) - 1 ④は、自分のパートと他のパートとのタイミングを感じながら、より正確に拍子の縦線を揃える練習である。

3) - 1 ⑤では、各パートが多人数になるため、④の練習より集中力が求められる。

最終段階の3) - 1 ⑥では、自分以外のグループの演習を見ることで、全体の楽曲を客観的に捉えることができ、自分への課題を見つけることができる。

3) - 3 結果と考察

ボディパーカッションの魅力は、作品を通して自分の意思を伝達すること、コミュニケーション力の開発や仲間意識・自己表現力の向上に役立つこと、また、見ている人を楽しませる活動に発展させることにある。

みんなで一つの楽曲を完成させるためには一人一人のリズム感の完成度が求められる。受講者のアンケートには「みんなの前で発表することは緊張したが、短い時間の中での成果発表の達成感を得ると同時に、拍子とリズムの関係を理解するができた」との感想があった。身体を使って音楽の要素を感じながら楽しく演習することが、音楽の基礎知識への学びの意欲に繋がることを期待したい。（岡崎）

4) 模擬授業(3) リトミック「いちご狩りに行こう！」

4) - 1 変化するテンポを身体表現する

音楽には様々なテンポが存在している。速いテンポ（Allegro、Prestoなど）の楽曲、緩やかなテンポ（Andante、Adagioなど）の楽曲、また曲の途中から次第にテンポが変化するもの（accelerando、ritardandoなど）があり、本実践の目的は、これらを身体表現することにより音楽のテンポ感を養うことである。

本実践では、「電車が走るイメージ」をしながら、遅いテンポ、次第に速くなるテンポ、速いテンポ、次第に遅くなるテンポを学生が体験する取り組みを行った。これは、電車が駅から出発し、次第に速度を上げ、速い速度で走行し、次第に速度を下げて次の駅に到着するという一連の流れを想像し、学生に実際に足踏みの速度を変えていくことを体験させることである。

本来のリトミック指導では、歩く、走るといった動作をすることでテンポ感を体験することが多いのだが、コロナ禍による状況を鑑み、学生が移動することなく速度感を感じる事ができるよう、足踏みの速度を変えることで代用した。

4) - 2 「ド」と他音の違いを聴き分ける

楽器の音を聴いて音名が分かるということは、保育の現場で音楽に携わるときに様々な場で役に立つと考えられる。その第一歩として、学生が「ド」の音を身につけ、相対音的に他の音名が分かるようにするための取り組みを行った。また、動作を伴うことにより、体験したことを脳に印象付け、しっかり覚えるという効果が期待できる。

本実践では、「いちご狩りに行こう！」という架空の題材を使用しているため、「いちご」を見つけた時の合図の音を「ド」とした。学生は、ピアノの音で「ドドドー」と聞こえたら、膝を叩きながら「ド」の音で「みーつけたー」と発声し、他音が聞こえたら手を振りながら「ちーがーうー」と発声することとした。

4) - 3 リズムを覚える

音楽には、様々なリズムが存在する。多くのリズムを経験することにより、楽曲演奏を容易にできることが期待できる。

本実践では、少し長いリズムを覚える取り組みの一例として、簡単な文章のリズムを使った身体表現を行った。先の取り組みの流れに沿って、「いちご、いちご、おいしいね、パク！」という文章に合わせ、「♪ ♪ | ♪ ♪ | ♪ ♪ | ♪ ●」（●は、4分休符）のリズムを使用した。このリズムを学生がしっかり覚えるために、①手で叩く、②身体の様々な部位を叩く、③周りに向かってグーでパンチをする、④足踏みをする、⑤身体の様々な関節を動かす、以上5つの取り組みを行った。①②③は、主に手を使った動き、④は、主に足を使った動き、⑤は、身体全体を使った動きである。このように、リズムの動きを様々な身体の動きを使用することによって、そのリズムをしっかり記憶することが期待できる。

4) - 4 楽曲における変化するテンポを体験する

本実践のまとめとして、楽曲「きらきら星」（フランス民謡）を使用し、学生が音楽のテンポに合わせて机を叩いて音を出すという取り組みを行った。初めは、速度表示 ♪ = 100 程度で演奏し、次第に速く

(accelerando)、次第に遅く (ritardando)、速く (Allegro など)、遅く (Adajo など) といった様々な速度で行った。

4) - 5 結果と考察

変化するテンポを体験する取り組みにおいて、その場で足踏みのテンポを変化させたケースでは、多少動きづらかった様子がみられた。これは学生がスリッパを履いていたため、足の動きが思うようにできなかったのではないかと考えられるが、音楽を聴いてテンポの変化を体験するという目的は達成できた。

「ド」と他音の違いを感じる取り組みでは、ほとんどの学生は、低音、高音ともに「ド」から遠い高さの音と「ド」の違いは聴き分けができた。しかし、「ド」に近い高さの音では、低音、高音ともに聴き分けが難しい学生もみられた。これは、楽器の音を集中して聴く経験が少ない学生にとっては、この取り組みの難度が上がってしまったと考えられるが、この点については今後精査をする必要がある。

リズムを覚える取り組みでは、比較的スムーズにリズムを覚えて表現できた。これは、リズムの音符「♪ ♪ | ♪ ♪ | ♪ ♪ | ♪ ●」(●は、4分休符)を見るだけではなく、「いちご、いちご、おいしいね、パク!」というリズムに合わせた文章を発声することで、容易に覚えることができ、さらに身体の様々な部分を動かすことで、このリズムがしっかりと定着できたためと考えられる。

楽曲における変化するテンポを体験する取り組みでは、馴染みのある楽曲を使用したため、戸惑うことなく行うことができた。様々に変化するテンポの演奏にも、ほとんどの学生が集中して聴き、音楽と同じテンポで机を叩くことができた。(二見)

5) 模擬授業(4) ミュージックベル演習

本実践では、楽器演奏の取り組みとして「ミュージックベル」の演奏体験を行った。「ミュージックベル」に初めて触れる学生が多くいる事を想定し、楽器の持ち方や振り方の指導と、楽曲「ドレミの歌」(R・ロジャース作曲、著者編曲)の演奏指導を行った。この楽曲は、①馴染みのある楽曲、②音階を多く使用しているという点でメロディーが分かりやすいため、演奏に専念できるという観点から選択した。

5) - 1 楽器の持ち方と奏法

楽器の持ち方は、実際に楽器の握り方を実践して見せ、学生に「ミュージックベル」を1本ずつ持たせ、利き手と非利き手で持つ練習を行った。

奏法は、「スプリング奏法」^①と「トレモロ奏法」^②の二種類の奏法を指導し、利き手と非利き手では音の出方が違うということを体験させた。それを踏まえ、学生は各自演奏をする時の持ち手を決めて演奏に備えた。

5) - 2 音の確認と楽譜の確認

実際に演奏をする前に、学生が自分で持っている「ミュージックベル」の音を確認し、楽譜に各自担当音に丸印を付ける作業を行った。これは、楽曲の流れの中で自分の担当部分を正確に把握するためである。一人で演奏する場合と違い、合奏の場合は全体の流れの中で、自分の担当音と担当箇所を正確に把握することは大変重要である。

さらに、本実践で使用した楽譜には繰り返し記号が書かれているため、記号の説明とともに演奏順序を指導した。

5) - 3 音名読みとリズム打ち

次に、CD音源を聴きながら、①メロディーを音名で読む、②メロディー全体のリズムを手で叩く、③各自担当音のリズムを手で叩く、という順序で、実際に音楽の流れの中で自分がどのように演奏すれば良いのかを、音楽を聴きながら確認をする取り組みを行った。

5) - 4 練習と発表

全体の流れが掴めたところで、実際にミュージックベルを使用して個人練習を行った後、全員での合同練習を行った。合同練習では、初めに4小節ずつ区切り、遅いテンポでメロディーの音名を発声しながら演奏し、次に初めから最後まで繋げて少し早いテンポで演奏した。本実践で使用した楽譜は、途中二声に分かれているため、学生をAチームBチームに分けて一声ずつ担当とした。両チームでの合同練習の最後に、CD音源に合わせて発表を行った。

5) - 5 結果と考察

多くの学生が楽器の持ち方や振り方についてその趣旨を理解し、積極的に練習に取り組んでいた。

楽曲「ドレミの歌」は、歌詞に音名が多用されていることや、音階がメロディーに使用されていることから、メロディーの音名を覚えることは比較的スムーズにできたとみられる。また、学生の席順にミュージックベルを低音から高音に順に配布したことで、音階のつながりを感じやすくなり、容易に演奏できたと考えられる。時間の関係上、練習時間はそれほど長くは取れなかったが、二声に分かれている部分も各自練習に取り組み、発表の場面でもハーモニーを感じながら演奏することができたとみられる。

(二見)

■注

- (1) スプリング奏法……1回振り。
- (2) トレモロ奏法……連続振り。

3. オープンキャンパス『リズムで遊ぼう』：8月23日(日)

1) テーマ「リズム」……高校生までに学んでおきたい「音楽の基礎(楽典)」

今回のオープンキャンパスでは、音楽表現・身体表現・リトミックの3つの分野でそれぞれ「リズム」をテーマに模擬授業を実施した。筆者の音楽表現の講座では、8月5日に実施した四街道北高校の模擬授業と同様、音楽の基礎のひとつである拍子とリズムの理解について説明を行った。音符やリズムなどの音楽の基礎知識を習得することで、ピアノ実技や弾き歌いのスキルアップに大きく役立つため、音楽の基礎を改めて確認しておくことは重要であると考ええる。

2) 模擬授業(1) リズムダンス「まねっこリズム」

2) - 1 拍子とリズムについての理解

「まねっこリズム」は、リーダーの創作したリズムを模倣するリズムダンスの楽曲である。8月5日の模擬授業と同様であるが、身体表現に入る前に、五線譜に書かれた拍子をどのようにカウントするかを理解するために拍子の説明をした。

拍子の基本を理解した上で演習に入る。音符や休符をリングの単位や数字に置き換えることで、五線譜に書かれたそれぞれの拍子を理解することができることを指導した。

2) - 2 リズムの創作

遊びの演習前に曲を聴いてみることで、リズム遊びの全体像を把握し、イメージを膨らませることができる。

本実践では、4分音符と8分音符、4分休符を使って、4分の4拍子1小節間のリズムを創作する。手順は8月5日のセミナーと同様であるが、大切なことは、リズムを言葉に置き換えて相手(幼児)に伝え、その言葉で相手(幼児)が真似をすることである。言葉で伝えることによって、幼児は「音」と「言葉」でリズムを体感することができる。リズムを歌の歌詞にして創作することは、生徒(学生)にとっても幼児にとっても、リズムの組み合わせが理解しやすい。

2) - 3 リズムダンスの通し練習

歌い出しの5小節間のリズムダンスの振り付けを全員で練習した。創作リズムの箇所からは、Aグループの創作リズムを全員が模倣し、Bグループの創作リズムを全員が模倣し、Cグループの創作リズム

を全員が模倣する。最後の「じょうずにできました！」の箇所は、全員が右手で大きなハナマルを描く。これを1コーラスとして、リズムの創作メンバーを交替しながら発表した。

3) 模擬授業(2) ポンポンを使ったダンス「夢の中のダンス」(作詞・作曲:阪田修、振り付け:岡崎裕美)
本実践で使用するポンポン(1人2個)は、事前に筆者が製作し、アップテンポの「夢の中のダンス」の曲に合わせて、参加者全員でリズムダンスを体得した。

3) - 1 「夢の中のダンス」の曲の歌詞、リズム、構成を把握する

オープンキャンパスの開場時からBGMで曲を繰り返し流し、曲のテンポ感やリズムに親しむ。振り付けは、2歳児の発表会を前提として筆者が考案したものである。振り付けに当たっては、2歳児がこの曲に合わせて自由に踊る様子を参考にした。保育現場では、基本的な振り付けは保育者が踊って見せるが、実際に幼児が踊る場合は、正確さよりも楽しさを優先して、自由に表現を楽しむことが望ましい。

本実践では、曲の歌詞を理解し、明るく元気に踊る幼児のリズムダンスをイメージしながら取り組んだ。時間の制限のため、曲を1分に編集し、1コーラスのみとした。

3) - 2 成果発表

コロナ感染防止対策上から密を避けるため、参加者を4グループに分け、ステージ上と下に1グループずつ配置して成果発表を行った。自ら発表するだけでなく、自分以外のグループの発表を客観的に観ることが大切である。それによって、立ち方、手の動き、目線、身体の使い方、等、自分への課題を見つけることができる。

4) 結果と考察

音楽の基礎的な知識や読譜力を保育士養成課程でのピアノの技術訓練の前段階として学んでおくことは、とても重要であると考え。オープンキャンパスという短時間の講座では、限られた時間内で体験することになるため、音楽理論(楽典)と身体表現(リズムダンス)の両面からリズムを体験することとした。参加者の中には、リズムに自信が持てない生徒や恥ずかしがって表情が硬い生徒もいたが、ほとんどの参加者は、拍子の取り方やリズムを理解した上で身体表現(リズムダンス)に取り組み、満足した様子が見えた。

このように、自分の不安な要素を解決し納得することで、自分の表現のキャパシティを広げ、次のステージに踏み出すことができる。仲間と協力することで得た達成感や成功体験は、音楽分野に限らず将来への自信に繋がると期待したい。

(岡崎)

5) 模擬授業(3) リトミック「海へ行こう！」

5) - 1 静かで穏やかな音楽と即時反応

ひとくちに音楽といっても、楽しい曲ばかりではなく、悲しい曲や嬉しい曲、静かな曲など様々な種類の音楽が存在する。本実践では、「静かで穏やかな音楽」を鑑賞するとともに、ある合図で即時反応をするという取り組みを行った。「静かで穏やかな音楽」が聞こえたら、「お昼寝するイメージ」で机に寄り掛かりリラックスをし、強い音の合図が聞こえたら、「目覚まし時計の音のイメージ」で急いで立ち上がるという内容を実践した。

5) - 2 ダイナミクス of 身体表現

音楽には様々な強さが存在し、譜面上では段階的な強さを表す記号「p(ピアノ)、mp(メゾピアノ)、mf(メゾフォルテ)、f(フォルテ)など」や、次第に変化する強さを表す記号「crescendo(クレッシェンド)、decrescendo(ディクレッシェンド)など」で記される。

これらを身体で表現することにより、体感的にそれらの意味を習得する事が本実践の目的である。ここでは、「海の波のイメージ」を使用し、「おおきな波」を「f」、「小さな波」を「p」、「だんだん大きくなる波」を「crescendo」、「だんだん小さくなる波」を「decrescendo」とし、4種類の波のイメージで

音の強さを身体表現する取り組みを行った。本来のリトミック指導では、波のイメージを表現するために、カラスカーフなどを使用して表現することが多いが、本実践ではコロナ禍の状況を鑑み、使い捨てのできるティッシュペーパーを使用して波の柔らかさを表現することとした。

5) - 3 リズム

夏に食べるフルーツの1つとして「すいか」を取り上げ、著者（二見）が作成したリズム曲「すいか」（参考②）を使用し、そのリズムを手で叩くという取り組みを行った。

上記のリズム曲を、指導者が1行ずつ歌詞を言いながらそのリズムを手で叩き、「はい！」の合図の後学生が模倣をするという方法を取った。これにより、1行を言葉のリズムフレーズとして捉え、フレーズ毎に分けてリズムを叩くことで記憶に残りやすくした。また、●の4分休符の部分は、休符（音のない所）を意識付けさせるために、両手で「ゲー」の形に握ることとした。

さらに、よりリズムを覚えやすくするために、リズム曲「すいか」のリズムが書いてあるプリントに各自歌詞を記入し、言葉とリズムを一致させる作業を行った。

最後に、指導者がこのリズムを使用した音楽をピアノで即興的に演奏し、学生は今回覚えたリズムで手を叩くという取り組みを行った。

参考②：リズム曲「すいか」作：二見美千代（●は、4分休符）

ス・イ・カ・はい！（ス・イ・カ）

♪ ♪ ♪ ●

パク・パク・パク・はい！（パク・パク・パク）

♪ ♪ ♪ ●

あま〜いスイカ・はい！（あま〜いスイカ）

♪ ♪ ♪ ♪ ♪

おいしーね・はい！（おいしーね）

♪ ♪ ♪ ●

5) - 4 結果と考察

静かで穏やかな音楽と即時反応の取り組みでは、学生は集中して音楽（音）をよく聴き反応できた。

ダイナミクスの取り組みでは、音の強さに応じて持っているティッシュペーパーをなびかせる動作を取り入れたが、初めは多くの学生がティッシュペーパーの動きを意識した手元が中心の動作になったため、身体でダイナミクスを感じている様子はみられなかった。そこで、手先だけではなく足の先から頭の先まで身体全体を使って動かすよう指示を出したところ、多くの学生が、強い音の時は大きな波を全身で表現し、弱い音の時は身体を屈めて手先に集中して動かすことができた。

リズムの取り組みでは、最終的には長いフレーズのリズムを覚えて動くのだが、ほぼ全員がリズムを覚えることができた。これは、長いフレーズのリズムでも、言葉の持つリズムと合わせて手を叩くという動作を行うことによって、リズムを覚えることが容易になったためと考えられる。（二見）

4. ワークショップ クリスマス企画『ミュージックベルを奏でよう』：11月28日(土)

本実践では、楽器演奏の取り組みとして「ミュージックベル」の演奏体験を行った。「ミュージックベル」に初めて触れる学生が多くいる事を想定し、楽器の持ち方や振り方の指導と、クリスマスに因んだ楽曲、「あわてんぼうのサンタクロース」（小林亜聖作曲、著者編曲）、「ジングルベル」（J・S・ピアボント作曲、著者編曲）、「星に願いを」（L・ハーライン作曲、著者編曲）の3曲を選曲し、演奏指導を行った。また、ミュージックベルに加え、保育現場の簡易楽器（カスタネット・タンブリン・すず・ハンドドラム）を使用した。

1) 楽器の持ち方と奏法

「スプリング奏法」と「トレモロ奏法」の二種類の奏法の指導に加え、音楽的表現の内容として音の強弱をつける演奏法を指導した。具体的には、f（フォルテ）とp（ピアノ）はスプリング奏法・トレモロ奏法ともに演奏でき、crescendo（クレッシェンド）とdecrescendo（ディクレッシェンド）はトレモロ奏法で演奏できることから、それぞれの奏法で強弱をつけた奏法を指導した。

2) 方法（3曲共通）

- ① CDを聴き、メロディーの音名を確認する。
- ② 楽譜に各自担当音に印を付ける。この時、分かりやすいように色鉛筆などを使用する。
- ③ 個人練習をする。この時全体のメロディーを読みながら行うことで、全体の流れの中で各自の担当を把握する。
- ④ 指導者が音名を読み上げ、それに合わせて全員でゆっくり演奏する。
- ⑤ CDに合わせて、全員で演奏する。

3) 構成

「あわてんぼうのサンタクロース」は、カスタネット、タンブリン、ハンドドラム、スズを演奏に加えた。奏法は、スプリング奏法とトレモロ奏法を併用した。

「ジングルベル」は、ミュージックベルのみ使用し、スプリング奏法とトレモロ奏法を併用した。

「星に願いを」は、ミュージックベルのみ使用し、全てトレモロ奏法とした。

4) 結果と考察

多くの学生がミュージックベルの演奏初心者ということもあり、持ち方、振り方共に不慣れな様子ではあったが、時間とともに次第にしっかりした音が出せるようになった。

「あわてんぼうのサンタクロース」は、歌詞が5番まであり、物語風になっている。歌詞の中に「リンリンリン」、「ドンドンドン」などの擬音語が多用されており、「タンブリンならして消えた」という歌詞があることから、打楽器を使った合奏形式とした。使用した打楽器は、カスタネット、タンブリン、スズ、ハンドドラムとした。学生がミュージックベルを演奏、打楽器は講師（岡崎）が演奏した。この曲はメロディーを5回繰り返すため、回を追うごとに学生の演奏技術が上がったように思われた。これは、学生が「間違えても次で頑張ろう」という気持ちで取り組めたためではないかと考えられる。

「ジングルベル」では、スプリング奏法に加えてトレモロ奏法も多用した。この曲は軽快な音楽であるが、同音を連打する部分が多いため、学生は楽しみながら演奏できた。当日2曲目の楽曲であったことから学生の演奏に少し余裕がみられたため、ミュージックベルの音量をしっかりと出すよう指導し、最後はどの学生も自信をもって堂々と演奏する様子がみられた。

「星に願いを」では、全てのメロディーをトレモロ奏法での演奏とした。スプリング奏法に比べてトレモロ奏法では、一定の音を出すことが難しく、しっかりした音を出すための技術が求められる。このため、奏でる音量に個人差はあったが、全員で奏でるトレモロ奏法での演奏は圧巻であった。また、最後に二声に分かれて演奏する部分では、ハーモニーを感じながらしっかり演奏することができた。

また、CDは比較的早いテンポであったため、これに合わせて演奏する時は緊張感をもって演奏できた。また、周りと合わせて一つの楽曲を奏でることで、協調することの楽しさを感じる事ができた。

（二見）

5. 入学前教育講座『保育者のための音楽の基礎（1）』：12月19日（土）

新年度入学する学生55名対象

1) 入学前教育講座「保育者のための音楽の基礎（1）」について

保育コースに特化する本学の学びのひとつとして、音楽の基礎知識を学習することを目的とする。

子どもの音楽的表現活動において、適切な支援ができる保育士を目指すために必要な「基礎的な音楽実技（ソルフェージュ）」と「基礎的な音楽理論（楽典）」を学習することで、学生全体における音楽的能力のスキルアップを図り、積極的なピアノ練習を促進することに繋がたいと考える。

2) 講座内容

2)－1 ト音記号を書いてみよう！

ドレミファソラシドを日本音名で表すとハニホトイロハであることを説明し、ト音記号がトの音（第2線）から書き始めることを説明した。五線譜でピアノの鍵盤の位置を関連付ける。

- ① 五線譜の第2線からト音記号を書き始める。
- ② 五線譜の名前と加線の説明をする。
- ③ 鍵盤図で中央のドを確認する。

2)－2 音符で書いてみよう！

ピアノの鍵盤の真ん中のドを中心に、五線譜に全音符で上行形と下行形を書いてみる。

- ① 五線譜の真ん中のドからドレミファソラシド（上行）を書く。
- ② 五線譜の真ん中のドからドシラソファミレド（下行）を書く。

2)－3 音符クイズ1

- ① 音符の白抜きクイズ 音符を五線譜の空欄に書いてみよう！

音符クイズ2

- ② 音符の1個抜きクイズ 五線譜の空欄の音の名前を書いてみよう！

2)－4 声に出して読んでみよう！

ドレミファソラシドのそれぞれの音から出発して、音の上行形と下行形の順次進行がスラスラ言えるようになることで、譜読みが早くなる。

（例）ドレミファソラシド→ドシラソファミレド

2)－5 音符と休符を書いてみよう！

- ① 音符の長さについて（全音符の長さを基準にして音符の名前が付けられている）
全音符 2分音符 4分音符 8分音符（♪の形のみ）
- ② 付点音符の長さについて（付点は、つけた母体となる音符や休符の半分の長さを表す。つまり、母体となる音符や休符の長さの1.5倍の長さとなる）
付点2分音符 付点4分音符
- ③ 休符の長さについて（全休符の長さを基準にして休符の名前が付けられている）
全休符 2分休符 4分休符 8分休符

2)－6 音符と休符で計算してみよう！

音符の長さを理解できたかどうか、4分音符＝1、8分音符＝0.5と設定して、それぞれの音符を数字で計算し、音符に・休符に置き換えて考えるクイズである。

2)－7 拍子記号について

今回は、4分の2拍子、4分の3拍子、4分の4拍子の3種類だけの説明をし（次回は、8分の6拍子を追加する）、拍子を表す記号の分母と分子の説明をした。

拍子記号とは？

- ① 4分の2拍子について 1小節の中に4分音符が2つ分入る拍子である。
- ② 4分の3拍子について 1小節の中に4分音符が3つ分入る拍子である。
- ③ 4分の4拍子について 1小節の中に4分音符が4つ分入る拍子である。

2)－8 拍子をリング○で表してみよう！

4分音符をリンゴ1個〇と設定することで、それぞれの拍子が理解しやすくなる。

- ① 4分の2拍子について 1小節の中にりんごが2つ〇〇分入る拍子である。
- ② 4分の3拍子について 1小節の中にりんごが3つ〇〇〇分入る拍子である。
- ③ 4分の4拍子について 1小節の中にりんごが4つ〇〇〇〇分入る拍子である。

2) - 9 拍子クイズ

1小節に入る音符と休符の長さを計算して、リズム譜に書き入れてみよう！

(4分の2拍子・4分の3拍子・4分の4拍子)

- ① 音符や休符を入れてみよう！
- ② 小節線を入れてみよう！

2) - 10 結果と考察

保育士として身につけておきたい音楽の基礎（Ⅰ）として、譜面の読み方・書き方、音符や休符の名前や長さ、拍子の数え方を解説し、項目毎に各自の理解度をクイズ形式でチェックした。ピアノのレッスンの経験歴や吹奏楽・合唱等の経験の有無によって読譜力に個人差があり、すらすらと理解できる学生と混乱する学生がいることは否めない。しかし、入学後はピアノの授業が一斉にスタートするにあたり、自分の音楽的な知識を確認する機会を得ることは大切であると考え。特にピアノ初心者にとっての読譜力は、ピアノ技術の習得のペースに大きく影響するため、この段階での音楽の基礎的な理解は、安心して楽譜と向き合えることに繋がる。今後も引き続き個人差を踏まえて、学習意欲を引き出す指導を見出していきたい。

3) 「ちょうちょう」(スペイン民謡)を、紙鍵盤で弾いてみよう！

3) - 1 紙鍵盤で「ド」の位置確認と指番号

鍵盤楽器を演奏することが初めてという学生が多数であることを踏まえ、鍵盤の位置確認とピアノを弾くために必要である指番号の確認を行った。

まず、鍵盤上の黒鍵は、3つの束と2つの束に分けられるため、この3つの束を「ゲー」、2つの束を「チョキ」として、紙鍵盤の黒鍵に右手を置き、鍵盤の場所を確認した。さらに、「チョキ」の場所を確認後、右手の親指を出して触れた白鍵が「ド」という認識と、ここから右に「ドレミファソラシド」と並んでいることも確認した。

また、一般的にピアノ譜には指番号が記されているため、指番号を覚えることは必須であることから、実際に両手を見ながら指番号を指導し、プリントに記されている「両手の絵」に指番号を各自記入して確認した。CD「ゆびのたいそう」(作曲者不詳)を聴きながら実際に指を動かすことを体験した上で、さらに指番号を定着させるため、指導者がランダムに言った数字の指で机を「トントントン」と叩く取り組みを行った。この際、ピアノを弾くポイントとして、指の先で鍵盤を叩くイメージで動かすよう指導した。

3) - 2 メロディー音とリズムの確認

楽曲「ちょうちょう」の音名とリズムを明確にし、その2つを一致させる取り組みを行った。まず、メロディー音が全て全音符で書かれている楽譜を見ながら、1小節毎に音名を確認し、次にメロディーのリズムを手で叩いた。さらにメロディーとリズムが一致している楽譜を使用し、メロディーを音名で読みながらリズムを手で叩いた。

3) - 3 メロディーの指番号確認

メロディーの音と指番号を一致させるために、学生が、楽譜の1つ1つの音符の上に使用する指番号を記入した。

3) - 4 紙鍵盤で弾く

はじめに指番号が書かれている楽譜を見て指番号を読みながら、実際に机上で指を動かした。次に同楽譜を見て音名を読みながら、実際に机上で指を動かした。最後に、紙鍵盤に指がずれないように置き、音名を読みながら指を動かす取り組みを行った。

3) - 5 結果と考察

本実践の前段階において、音符の読み方や音符の長さについての指導を行った（担当：岡崎）ため、ほとんどの学生が音名を読むことやリズムを叩くことは問題なくできた。また、使用曲が馴染みのある曲であったことも効果的であったと考えられる。演奏技術の有無や楽曲の難易度に関わらず、「知っている曲を演奏できた」という喜びは次への学習意欲に繋がり、入学前にこのような経験をすることは有意義であったと考えられる。

3) - 6 まとめ

本実践により、大きく三つの成果を得ることができた。

一つは、コロナ禍におけるリトミックの実践である。本来、リトミックは身体全体を使って音楽を表現するため、伸び伸びと動ける広いスペースが必要である。しかし、コロナ禍のため十分なソーシャルディスタンスを保つ必要があり、教室内ではスペースの確保が難しかった。またリトミックでは、音を声で表現するために歌うことが必須なのだが、発声についても同様の規制の環境下であった。このため、様々な工夫をしながら取り組みを行った。

具体的には、学生が席から離れずにできること、立つ、椅子に座る、しゃがむ、回る、手を使うことを動きの中心とし、歌わずに音を読む、リズムをたたく、または心唱をすることによって音やリズムを感じるという方法を取った。このため、本来のリトミック指導で習得できる事が多少損なわれる部分もあったが、限られたスペースや限られた動きの中でもできるリトミックの指導法を創造する機会となった。

一つは、ミュージックベル演奏を活用した実践である。本実践で使用した楽曲は、一般的に馴染みのある楽曲を選択したため、メロディー音を覚えることは比較的早くできた。しかし、音名で歌う経験が少ない学生もいることから、メロディーの音名の確認を丁寧に指導したため、限られた練習時間の中でも、ほとんどの学生が間違えることなく演奏できた。このように、馴染みのある楽曲のメロディーを音名で読み、音を覚える経験を重ねることにより、読譜力（ソルフェージュ）を習得することができることが確認できた。

また、ミュージックベル演奏では一つのメロディーを複数人で奏でるため、他と協調することの喜びと責任感を育むことができた。

一つは、紙鍵盤でピアノを弾く実践である。本実践では、鍵盤の位置、指番号を覚えることに加え、簡易曲を1曲演奏した。1曲でも多くの楽曲を弾けるようになることは保育士を目指す学生にとって強みになる。このような実践を経て、ピアノ実技演習に臨むことは有意義であると考えられた。（二見）

Ⅶ 今後の課題

今後も、保育の現場における様々な変化とニーズに柔軟に対応できる学生を育てることを念頭に置き、多様な角度から音楽の経験の機会を増やすことにより、学生が音楽に親しみをもち、保育士としての幅広い音楽表現を習得できるよう指導していきたい。（二見）

■引用文献

- 1) 幼稚園教育要項「文部科学省」、平成29年4月施行。
- 2) 山田俊之著「ザ・ボディパーカッション B級グルメパーティ」音楽之友社、2014年。
- 3) 山田俊之著「楽しいボディパーカッション3リズムで発表会」音楽之友社、2011年。

■参考文献

- ・上野陽子編「みんなでミュージックベル！ークリスマスソング」全音楽譜出版社、2018年。
- ・二見美千代「幼児の発達段階に応じたリトミック教育の有用性一年齢別グループ指導の実践を踏まえて」『千葉敬愛短期大学総合子ども学研究所年報2019（令和元）年度』73-86頁、千葉敬愛短期大学、2019年。
- ・岡崎裕美「0歳～5歳児の発表会よくばりアイデア編～」指導書52-54頁、CD-M17、株式会社メイト、2016年。

VIII おわりに

超高齢化社会の進む日本において、高卒人口の減少は止めようがなく、卒業後の進路においても4年制の大学に進学する傾向が強い。保育・幼児教育分野への関心があっても、短大を志願する者は年々減少している。そうした中で質の高い保育士・幼稚園教諭の育成を目指す本学において、社会に出た時に十分耐えうる力を備えた人材として送り出せる教育が求められている。音楽教育に限らず、すべての授業、指導内容、指導方法の検討は、学生に本物の「先生」として自信をもって送り出すためにも必要であり、本学の存続の大きな決め手となる。

本研究は、ピアノの未経験者における入門期の音楽教育の在り方、グループ分けについて、入学前教育の講座で内容や指導方法を実践の中で検討し、提言するものである。今後の総合的な音楽教育の推進の為に、この取り組みが少しでも役に立つことを期待している。



資料1 2020.8.2 リトミックで遊んでみよう（二見・岡崎）



資料2 2020.8.5 四街道北高校保育特別講座

写真左：「保育者のための音楽」リズムダンス・ボディパーカッション（岡崎）

写真右：「リトミック」変化するテンポの身体表現・「ド」と他音の違い・リズムを覚える（二見）



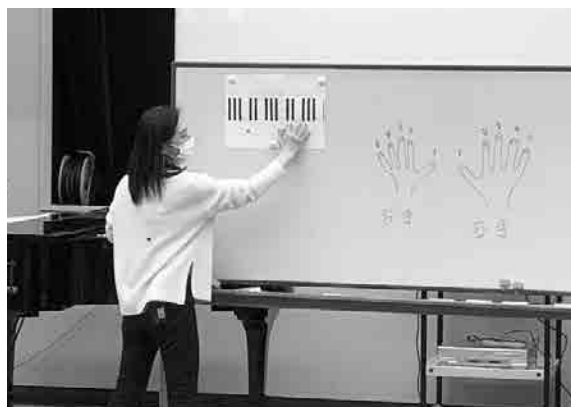
資料3 2020.8.23「リズムで遊ぼう」高校生までに学んでおきたい音楽の基礎

写真左：拍子とリズムの理解、リズムの創作、曲の歌詞・リズム・構成の理解（岡崎）

写真右：身体表現図化で穏やかな音楽と即時反応、ダイナミクス身体表現、リズム（二見）



資料4 2020.11.28 高校生ワークショップ「ミュージックベルを奏でよう」（二見・岡崎）



資料5 2020.12.9 入学前教育「保育者のための音楽の基礎講座」（岡崎・二見）

写真左：階名を書いてみよう（岡崎）

写真右：紙鍵盤で弾いてみよう（二見）